草菴集難註　全

ヘ 4
2893

櫻井元茂先生述

草庵集難註

野田彌兵衛梓行

草庵集難注序

余少與櫻生暱生時已好讀書雖與少年居時ミ顧為余言志曰盍暱至於相謂曰他日無相忘在醜夷即少年從旁稍窺其相得也亦謂少年常游耳生為人温雅悦和歌博士家言而學焉遂大好之蓋其素志云後數歲索居不得常ミ而見之然時

見則已論各言爾志即酒酣耳熱相呼鳴
鳴顧思少年之日日月不居忽如隙駒益
知致遠之難也懼然胥命方生在篠笞余
適移居就其比鄰復與生歡一年所不問
旦暮睚踰往昔而觀生所好益篤矣已何
余遷城南生亦適甲適和遂至于今寥々
十年矣于嗟闊乎書問亦不得屢或一得

則猶見其向近得生書曰此間有一傖父
作草庵集解不佞不欲以堅白鳴於吾
所好亦伎倆旁觀乃暇日摘發若而遂成
一書有梓人請焉以舊要故不有言也願
得子之一言余追想往昔今且三十年邪
當時少年有一存者乎其徴之也知生志
者舍吾誰歟亦唯彼此今老矣且各耻天

未特相知於心耳久要不忘平生之言靜言思之乃為生三致其意何辭焉況且生所好老益篤則其愈精以計畝三鼓之後可知惟余寡聞於和歌未學也不能為生秉前茅而進則此獨所不盡也享保己酉秋八月友人服元喬序

草庵集難註序

鹿門櫻子榮已以善和歌鳴吾藩中曾遊于芳之知識之許而得平安宣老草庵集註而讀之門人問曰宣老其勉之與榮曰勉矣又問曰全王與榮曰武夫淆之於焉榮

東筆於龍川之上。格非斷疑
以著難註書二卷。門人欲梓
之。榮懼薄宣老之功。而知彌
久矣。乃暨梓之。問序於余。余
受而卒業焉。則厥然興而曰。
非豈可掩焉乎。非豈可掩焉
乎。非莫非於飾非。過莫過於
文過。順非而澤。天下之所惡。
告非質非。爭友之義。友也以
友其德。敗德因蓄疑。定疑斷
疑君子之事。信以定。義以斷。
於事何猶與之有。禮曰。君子
愛人也以德。細人愛人也以
姑息。於仁何鈌之有。諤諤哉

子榮愛之以德詩曰采葑采
菲無以下體德音莫違於戲
子榮之謂也以之為序
享保十四祼丁酉冬十月
郡山柳里恭撰

草菴集難註序

和歌猶詩以六義曰存詩乎曷云和歌且不可云論
規模法制同軌異途皇〻如也雖古之能者才者在
壼奥發希頓公名家作粛雍和穆雄渾並測為妙世
矜式頃解其集者謬見臆説肯趣徑庭
太和郡山櫻子榮氏慨然而起志復古用為編述謂
非難〻之難註不可難〻之難以難為難以為非難以
死難不為不難則難是曰難註當矣非吾人之才之

能弗以善俾頓乎釋然乎泉下千載子雲哉子宗氏嘗
爲小村子季之役以其處事苦道既開明猶以作者聞
斯挙也渠護以之補葺以之而功弗尠小子葉氏固
不爲讓難徃行其不閲老則答耳

享保庚戌十月吉洋陽處士長崎平君舒撰于郡城
东門之僑居

おろくよあぐとよのつゞりとすじおわくんバはのつゞら世ちん
山乃井にながきんバはなく為にも何乃ゆくへしばわすれ
かるゝるしよくよらんでよこぞふかゝるきわざるかよくきて
おきうゝめむへいおくかゝるしらざるしあやゆかき世へ侍しとき
侍かぬちゝきさらゝ名きこてえぬらえ東の下野ぬ河
宗祇法師出称法印季吟法印乃かゝるにわと称する
すに侍かいよくかゝるきりゆへ小ころ称山く侍しめさい何
こゝに吉野のむゆらしくかゆらし侍しこれとよそにひ
志れとりちる人のうき世にさきゝらじやとくろのあわに
庵志めく住にけるが幸ひよ絶ねまゆそむりし今乃
栖縛ふさしゝりつめぐちてよおくらん程のつれ〴〵かなあ
まひくよとく草庵集読解さいつら然ざらで侍しは
いとめつらふおがえくらわて之し又侍らふ小出翔んかくいもず
けんくらハこのくしるどおかふあしくとゞ旅衣とゆよるあひく

爰古のうたにつゞめあはせて詞あらため侍らずなどに
よろしきをえらせ侍れどさかりなくさのあやまりびらうらにやまさく
いでや梓にものせむとせめくるこの人ひがきゝてこてんかうも正し
げにめでたきことにあらひ給ふるよし侍れどもあ
おろかなるものせんさくするをうけ給はりてかく侍れどもげに老後の
室に入のむかしえふかきにしもおほふられんことのほどの
にあふこてびひ侍りされどや川わが説をわすれてやや
ものしづやうけがふのみひとつをさだめられて侍れど銘すら
あまれうをひらぬめてもはぞ後の君子をまつのみ

郡山　桜井元茂うつす序

草庵集難注上

桜井元茂述

春哥川より始

朝かすみゆるかひきえみかたのはしやにのゑむかへ山をまちやらまぬかん

謗解云たなびくは立たなびく也　靉靆　霏霺　一説　輙引　同

薄靡　神代巻　式部喜撰式云若詠大和まづよむかる哥とい

あられど式部にも大和とよまる同じ哥のうた高間山より大和国

の高間山と云後也高間山は和州葛上郡春日山の南なり

あしひきのかは　他例　哥にやまるあたま山のそ間よりまちつくられぬ

うつりの月　土佐内院　新古今林　哥々や三室哥々や布留の社とも

よめる何も郡もちがひあれども同じ大和国なれば大和にあるべく

大和の三室大和の布留の社と云後に詠哥のなか和ばあらめ

一説ノかさねたる詞と云るべし　一説詞林採葉等にある事

長キ故略之　ならの京奈良の都に遷れ給へれど此ぞ旧きくも

風京の寒気しる高山と雲のたなびく

濁氣(マツキ)ながらかしこきなる有松長宗なる寺し城とおもゝくこ
そひのべられたると忠岑の歌なれこと世をもいふことしの
山もし新らく今あらたゆかんとあけしるらひにしく巻頭(クワンド)の
哥にとられたるおもひ入りなるべく首べしとこ

愚案これはとく日本の無名之(ムミヤウ)哥のなかに今あるものを
かゝるか川なれど日本はいづくともや春の立るなるべし
このみちゆる吉野山こそときゝ侍らんとやといふよしいふべく
此ゆる詞をあそびなかさきことはなるは物事なれと高吉野山と
よあるもろの詮(セン)ちておもしろしむを巻頭の体(テイ)なく
大きなるならぬべしとて家持の高安山ハ城上(シキノカミ)郡 家持(シキシマ)り
あかね添上(ソフノカミ)郡の高円山をも眺ず 春かしくるぞみるのの
夕月夜清(キヨ)く照(テ)るらん高円の山 新拾遺 赤人 月かげの潔(ケ)しくなし
みかさるの尾上の宮のまなかの 新拾遺 照法師 此二首之城上(シキノカミ)
郡家持のる吉野山おもはるやかんで添上郡なるハこく

大和の国の東(ヒガシ)の方にありて此二首も西の方にある山なる
夕月夜ならのうらなる讃解にいふ高安山
大和列添上郡春日山の南にあたりく高くあり
がらそまの北(キタ)にあらぬかくなら(ナラ)の都の東なれ
どもみれど東のかたにならへやげ三笠山をもよむべき
なすこし南なれる高円山なよって侍らんとの十二のなんなき
わざならべし 家持ハ日本の名(ナ)しくも歌の吟(ウ)にれども
此文字むも大切なく高円山も又あらん家まで巻頭の
哥にかゝりぬべきまかへされど義理(ギリ)も行かるまず
そなく反してよく味(アヂハ)ふべきものなる注讃(ヨロシカ)らん
注釈(チウシヤク)さらおほん御事甚上 家持の高円山も春日
山の近辺(ホトリ)にて東(ヒガシ)のかたにも眺ずかすぐあや
とゆべし いふ也くく新らかれる海山然ことなる国と春は
きよらかに 志太木後九条内大臣 一首のみ此高山 ゆくえ侍るべしとて同じ

名にしく土地のなじみなるは一国乃内にもまくなから
ず御室(ミムロ)山も大和ノ葛下(カツゲ)郡に城上(シキノカミ)郡二所にあるを
「嵐吹みむろの山乃もみぢばゝたつたの川のにしき
なりけり 後拾遺 能因 「神がきの御室の山の榊葉は神のみまへに
しげりあひにけり 城上(シキノカミ)郡の三室山也又三輪
山のすそ三輪山は三室山とも神岳(カミヲカ)山ともいふ也「神なびの
みむろの山を秋ゆけば錦たちきる心ちこそ
すれ 古今 忠岑 「神なびのみむろのきしやくづるらん竜田の
川の水のにごれる 拾遺 是又葛下(カツゲ)郡の三室山也
神なびの三室と詠じけるは葛下郡龍田の三室
とて詠ぜられし城上郡と大やうは分るべしされど
三輪山をも神なび山といへるもあり一概(カイ)にもあらざるべし
此なやみを古人もおほせられたる又なべてのなすら
ふる里の名あるは二所なるもよくつまびらかにしるべく

古人の歌にて見分くべし

山科

おとはやまのあなたなる逢坂の山を越え山科の里とこゝろえあまた
諺解云山科の里は武蔵国也山科の里と號(ガウ)けるは八王の
おほくの草の里なるゆへ山科の里といふ也それよりおほくあまた
村乃東にあたりてまかりこゆればそのかみの山科といふ
このあふ坂も山科の里なりとぞやと人々ゆゑに山科の里も武蔵国
なれど東路やと云こともぞ春の日のほどと又山科の関(セキ)もある
東国乃方より来くあまた 例「東より山科の関の名のあまた
よるくまかりたる旅人をつゞきまし 拾玉集「やほよろづくおもえ
くらまゆの里とや山科の関の名もなにそん 拾遺愚草「
今せんなるもし東路の里と八あふ坂の村の東の
山まくまゝのちればやがて山科のこゆる志らねば年内八山科
越せ紀とある一招那ればやがて山科のこゆる所は山科の

霞とこそ見れとよめり 下略 又云「秋霧のうすきやまぎれ其紀
なくん秋の夕はいとどしらでこそ川、散木集春 此季の霞も紛寛
此人すなはちこそぬやうあかゆなふべし「花ハよし 国信卿 川初変
名がらひもなき杜若なるの霞とし年あと咲わくし
留春不用霞 朗詠 此歌のかなりける山川にさ花もちらぐ
かすとよめる 此春風さむくこがるる 光俊峯るに政倉 歌枝撰春上「つ里
まがやすまれ浦さのたのし月の霞とうけるなるを 拾玉 三 此三首
同し掛かくよめり此こども仍掛すこく霧の色の業なるを云其
為べし桐宗八要直解巻二に六義は出せり其中に掛業義
依主義乃二川周に伊ならなる事多すれも略書すに掛業
義とも其内に其業は多くるなき人掛業義と云依主義も
主にも依りく名なる義にもとへ此家の霞も霧の色の霞なる中へ霧が
主に為之依主義也又霧のならぬく霞の名とすれも掛業義に
為之なとへも初桜並桜と云も神らくわざなるとうくさく

わさ有人掛業義之山桜家桜も山になく家にある人依主義之
山と家とが主なれも之此二川ゆえれも連綿の詞か註義
がよくまうり之云と
愚案霧の霞とし闇八掛なるをして人なでもあるふれも
まるのみこんまるな霧の霞のかくとめし也まるなな一概の
れてもまるもかなんあるな人あふ坂も年なゐをでてともし
霧の霞がとりて萬之霧のこゆるなとどめしとりつし
あらずまるのこゆる他とどめし之 諺解にまるのこゆるなるに
霧の霞とこそ見れといふ花まちるべからずし「別れゆく春の
霧の霞もちる月ゆうとめやしまする 續千載「へしまり
名他のうとめく東路の霧の霞も春ぶ芳める 秋於遠
いづれも霧の霞れ年月をさめぬより名をも又桐宗
の六義かくなるいへるを並ぶまきわざ為べし又云此霧の霞る
霧霞の霞ある人霧が主に為之依主義之と云事 以下他

名能也是ハ都也又云霧にまぎるく鮮の名とすれども物業
秋よ略之と云ふ是ハ脉(?)他ふれども有滞秋之もし霧が
書よ鮮とあれども身体用ある也人物業秋と略之かくの
ごとくおかしくあれども夢の紀のとして作るを是ある書も
あらいふし〳〵の見達此宗ぬ草なく元作るべしかくすれども
俳の道理も家書のうちも不足なくよくすむるなるあるを
かしこ浅蛙是ぬらく俳しくとおもふべし邪義ぬ立るも
あるべからず

初春鶯

鶯のあかつきやどりも是作のひとよ眠れどまや鳴らるらん

諺解云あかつきのやどりのやどりとも云ふ古年作しやどりの古巣之 古今誹諧二の鶯の
あかつきのやよ也此あるさびや秋山もしん人のつれなるらん
二句ハぬなる也作の節ぬもと以て称よう宿くよあ也鶯をも
作よやどらぬぶれども作ぬよく合せく作の縁よひとよと
でけ也鶯の暁やど也の作なれども一夜ゆれどまたく出
よる所鶯も古年とく略之と云こ

愚案諺解の説もむき大意をきこえん作也但し一首の首
尾も鶯のあかつきやどりし作と称する年鶯とく一夜ゆゑ
れども鶯のまえなると古也つくめよのんとうまとわくらとあく
うきせくよあかつきも此宮のまんぬつくべし

等類流編たる家六首よ

それやこゑ鳥げなくくろきまのひびくく年を立春る

諺解云 此春の梅原もいまちぬくちれども小松原よ浅茅
がはらと家物あけしも気也春のあるべき云をし紀あり
色葉集云 古春 云 春やんよく霞なる也の立之云を詩よ同雲と
作るも同し 下略 又云 春白も梅原も大和国三輪の北北義之
梅原のうつるとくし梅原よ陽気の春く己いろく発する気之
松柳春当作あどの夕かるといふも同し都之宮のんく去年此

香乃字しるしてまだ晴やらねども春也人桜花のさかりに
なりぬれば霞みて消息の到来待ちかねしと
感ぜらるなるべし
愚案読解に去年の春此字しるしはまだ晴やらねども
桜花のさかりになりぬれば霞みて消息の到来待
る意也愚意なるといふて此説かなふ人也桜花にあはぬを別霞と
なりて霞はなく桜花のさかりなるを桜花のさかりを催されて
催されて霞むなる時なり桜花のさかりを催されて
霞むといふて此一首はみなあはぬ心の霞とかすみ
白の桜花といまだ咲かぬを小桜の霞に消えず
なり 野別云 いまだ咲かぬといふ此霞のちるまでなき
こゝろなりてすゞしき霞のかゝらん別に桜花ども
あらく又うすく催されて霞むなる時とおもふべし
春の桜此花の月とや見るらん霞にかゝらんその

ろうそくかゝらんもなし 新勅 宜秋門院丹後 花ちるまがふかたなき別かるゝかたもなし
あらしにちりし又此集春下花のちるよひさかたのひかりのどけき数
桜ちるとよめるも桜のちる也人桜花がちるらん桜花の
ちるらん小催されて桜の散るといふてしあるべからず

鶯出谷

鶯なき谷のあるすの鶯といへどやよりそまちかゝらん
読解云 鶯なき谷はまだまよりまたれて咲ぬくとく
ある梅おもひもなし 源氏古雑下 谷には光のさゝず也人まちも志な
谷紙也く世間かまわぬさらんと之花の詩経のんとこも
見しもとの鶯なきとて物(モノ)陰(カゲ)也人の陽気の至(イタ)り之二
愚案鶯なきとその鶯なきに鶯なき谷よし
まだよそになれも咲くとて数ある梅おもひもなし宗祇
抄云鶯なきと八月日のまでもいへぬ不なきといへる
人々の鶯のちかきよりもしく花久きまでのそれぬ

山里 松風の 是も月の光なり諺解に見えたるは八雲の光
極陰の陽氣の運りきたるといへるを志るへくしと月日の光
なきといへる先賢の秘傳なりすへし

清子か大納言家句十首に　鶯

あひにあひて物思ふ春はかひもなし花も霞もめにしたゝらす

諺解云あひにあひてとは八極二儀和合の時に云詞也春の

月と鶯との交り相に合て和合して此あひにあひて

ものおもふ春の我神にやさしき月と人の情もかなし いせ物語

袖のぬるゝのたまの月をもぬるゝ也 伊勢 古今

年相に合てもはや八千世の末とはいはん 拾遺 後撰

云すてゝ見事なる上の相の字ハあはれなる事と見て 林下

にあひとし其心も露もはかなくも皆ぬるゝ 後撰

ならむなくゝ上の相ハ手に合ふ文達の字

に重ねていふなり 下略 一首の心ハ下の句にて上の

白妙こそ光るゝ春霞の中の花のゆかし春にこそ暖かなれ

なく鶯もなく此れ河の相に合て交はる河海に川

のれのあらぬの岩間の今の世にあらこそなれとも後撰の

歌の意の如く其まゝ云こ

愚案諺解にあひにあひて物思ふ間に其の心も一拍に

此德にて法華方便品偈の諸佛興出世懸遠値

遇難こいふよりもまたまた[illegible]の一拍に

あはれとなるべし

次 若菜

今はやまけふ[illegible]の山の[illegible]つかん

諺解云足引の山は国の名にしある芦原なる芦原の字

て詠む山となる又山でなく足引の[illegible]

ようこいふ二説雖信用有二授受

愚案諺解に足引の山は国のなごめ芦原なるを芦原

川のなを詠が山とあらハ又山をよまれども山への心をふくむ足柄
川とよむといふ二説勅信用有リ口授といへり古今集樹
も咲ぬらし足川の定家卿密勘に云足川の山
此等の説あれど中にも是を方足川ぞといふべく也で
けつらるゝ今もあれども是よりくだらる作しるし後成卿
定家卿はよまるゝずとのたまへど有口授といふ事なる由文信
用すべからず

二月餘寒

さほ姫のなきさらき花もしらく霜にさゆる春の山風
諺解云春の名は餘寒也さほ姫の衣も花紙今さらに
きさらぎといふ二月の名をも見られく世間も霜にさはるは
の春ざくさゆるを云こ
愚案諺解ニ二月の名をもいはれくといふもいはれく
水をあらはし八着の字紙出作しだ着ぬさらぬとと

は名をもあらハ尽くとぬき合ふ諺解のおもむきたく
も書の方るやうなれども実かく細小なれどもやさしく作れ
ども此集注釈の作者詞の内外穿鑿しあれ
説どもあるよし作られたる紙つらんさくやくそのかの
作るとり外あとこそ染ぬのあやもやさしく作れども
はかまあらざらしの也人是をも筆はさしるとき
作なり

庭梅

我袖より川ともむかしく吉ぬれて梅咲宿の匂ふるるる
諺解云野外ならぬ庭梅の匂ひまさりたる朝の袖より
川ともおもひゆるすほど夕庭前にある梅にある也人
常にむめの香に移して梅香くいるゝ我袖には袖より梅香うつも
おかかえたる恨といへり家語曰與善
人居如入芝蘭之室久而不聞其香即與之化矣

與不善人居如入鮑魚之肆久而不聞其臭亦與
之化矣常住其あたりにちかくハそのかうにもあやしぬなり
とも引合てさとるべし　ここ。

愚案歌のこゝろ梅のさかりなれどその香もなくてあたり
ちかくさしよりて袖に移してこそ梅の匂ひもしらるれ
匂ふことも更におぼえぬからに自ら花にちかくよりてこそ
よそにては知らぬ匂ひもある也といふ心の詞
の上にて匂ひの立ぬるをとゞめて袖にうつさんとの趣也
春のかれのなきをみるにかれこれの香りもなく自ら
なれば一首の珍しく聞こゆるなりつくづくとみるべし
なる事之諺解のことく野外の梅をおもひて
庭前にて梅の花を見るのは梅をおもひて野のす
がたをもそへておもふひとつの心をみるなり
詩にあることわざもあれどかくぎこえぬ

花の香をかくるらんと　雅之　梅五月雨の月匂ふのあたりは
言ふなりしきもみえさ袖ふくるるぬらる　基住　ここ
ろえてあらしきがこれも一首の珍しき詞とみゆべし

梅　春雨

香ふ川にありしものぬれて匂ふなり梅ぞしるもらる
諺解云あやしく八劫くさき古来の注あれど宜しからず小中
にもしこはよし又世にいてもあなどる人の詞の注に
何がまつまらぬわがままにまかせて詞に自
あることを上古よりしめしく言語の教すべき時何と申
云ふによりてわが身を語にわけてゆくにあたる詞の
後後に又其後子語にも自語にあらしむるに
まよひしく自語の母語にて云ふ文先天の詞後天の詞
といふ語にわかりとへるを仮名の数の三四五
と有時上下の略して云ふ又上一下一川又八中の略なり

此詞もあり又五音の竪横の通音あるは又隣近の
通音あり又轉音と再音と又音のひびきよりつきて又
字を反したる字母と帰納とかくいひてもありつるが
中の詞却てと云注の附く中のものは兆すなるの
なくもの下のるのの二字加へて反をしるすかなよろ
べきことあるからしきといふ等はあらぬと字ゆゑ
もかく却くのかりて叶へてなくてしといふことはるべくの
んとすべきゆゑを重ねくなるとそれぞれぬれなれば
すなれども却くぬれもあく春雨のみありしゆゑに和らし
ことのなくて雨と見るゆゑ雨具など用ゐもすべきとぬれ
ましきことわりとぞ重ねてなるゆゑ用ゐもせんしてぬれ
なるこれ却くの注え又始より雨のありと見てなるぞ
雨具の用ゐは為すべきよくこれかどまでハぬれまでぞまま
雨のありやうもなくてすむとぞ重ねてしまで用ゐも

そぼふりゆくとも重ねかけ旅の衣よくぬれたらくこに
愚案云のるともまくよりすなるのもる雨ふれどこそやらん
てゆるをもえんとすぞなりてる人がたき路ともこのぎりし行く
却くをぬるしてるゆゑ之あるとえてなるもやどりをとて
まへなれバ之又旅衣なとといふなれバゆくんともまた雨も
そあとも入きたのべの方こうりとて袖ぬらし久しき 大本中務のるこ
劉長卿詩ニ細雨湿衣看不見一首のおもむきある雨
のことやうゆくえてがてきよしかもあめのあはれゆく
えうどうとぞ重ねくハ春雨の論ふりしろの之諺解
に雨具を用ゐすぬといふ説も卑俚也如何雨具を
もちぬ旅やとのなべき

聖護院宮五十首

ゆふぐれ重ねたる袖のかごと出人ぞそゆく月のをさきせん
諺解云此之重八計のかたせやうる月え袖ゆくも又ほろ重

ふくも月のうつりやとらうらく 例 波のうつる袖師の浦は秋の月
看るかけふすゞしや夜ぶかゝらん 拾遺愚草下 もれ入る石間の水の
あらぐのと看るかげ月は袖にぞやどりける 光明峯寺 風雅上 袖に宿りし
月のかげすゞしさうつるにしるる間に宿れりかゝるゆく
涙のうかびて見ゆるにもやさしさる月見ゆるかな 涙見ゆるかな
月は宿れりく袖ゆゑに見えのやどりがほ（ソラ）にゆるし何とも宿れ
かこち顔なる我が涙かな 又 月のかげ見ゆるさして云見ゆる月にし
月のかげは添さしてくる世 影にてゆふべて月の光は云
又月のかげは云ふとも何かあるのおもく中く注に云二
愚案云のみて袖の涙をして月の全体はやどし宿る
かくあらぐかゝる宿は袖にやどしかる涙ゆへに宿し
てこの月をうつすゞる之諺解にいへる間に宿れるか
されく涙のうかびて見ゆるもやさしさる月見ゆる
かゝといへども又いはゆる口ねぶりにおさむ世の字は諺解

うりひとしく月はさしもせず見ゆる（エ）（ヨウ）ことの中も
のぞおかせねく
淳正尹親王家五首 春月歯
かすむとも中にやどし七十の涙の袖のちるは春の月
諺解云 年生の涙中く見えて小中にも七十の老の
涙もし一入かすむ見ゆるかすむといへれずかくかゝる
月の出まてえゝがくまる云て
愚案云のみて若きほとも涙にて月のかすむと
いへきは今七十の老のさかりれど涙まて霞む哉と
をいへ川といはし老後かれこそのつゝ月とうすらく
見ゆるは川のすゑとく中くいへどの云ふらく味ぞ
いひしは入きびといはでぞいはれずといはでなく
おもひ起す諺解に中にも七十の老は涙と注して
中くは却くのみになへさるなしく霞むとし

いづれとも説ある中に正意とおぼしき事のみをしるさ
此古今の説の通を知べくこれ作者の義理よく
聞ゆれどもなべてのく僻説にまどはさるゝ人あるや
うになんある

小倉大納言すゝめられし小野社三首に　待花
春ごとにきく三山のさくら咲やとて今ぞまつらん花の春かな
諺解云　初春は余寒のつよき時に今待花の比にて
さくら風のさむき人なればいまだ花もちりつくまじきころに
愚案春の花は風にも散らぬにあらねどさるべき頃
いまだつぼみもあらぬ時なれば風の中にもきく
花咲やらねど今ぞまつらん風の吹ともむざと
ちらん花もなしといふ事をおもふべし風の中にもさき
て咲やらぬは人の風にもちることなし諺解に初春の
余寒のつよき比に今まで風のつよきか

いふは風雅に八雲一風情優なる正意もなし一首
の詮とする風なるといふ風の字に余寒はつかひたるを
りにしかるべし

法印長舜すゝめ侍し賀茂社六首に
白雲はまたよそながら山ざくらかたみになりしたか川の春
諺解云　み吉野の山のさくらも白雲とあやまたれ
ひ例　読人不知　後春下　白雲のたえずたなびく峰にだにすめばすみぬる
世にこそありけれ　雅高　古雅　雲にまがふて聞しれたれども
花やちりぬらんといふも雲によそへてかくはよめるなり
雲の絶えぬる山のはの夕ぐれに嘆つゝある
べきことと云々と云々

愚案諺解にはまづは面白けれどもといへる
花をはまがふ雲にまがふてうきを見く思ひに
まことにあはれなるをなげくのみよく味ふべし

此次の句は武くちがひにてつきみよしかゝる假名の
さま／＼あらはれても雲はほどよくからずはたいへの
句かんじんのところよりさしきこえざれども一句ゝ
まがひなしぞところの捻だかりて門ごとくは常に
わけりしたまがふとあるとも云詞一句ゝまぶへいたゞりで
たゞこれをくはしき詞を又ところより注者雲云と
ある趣は賞翫しぬるかなをかしといへりけんはおほくは句を
はの句は入なる也へ西京は詩のがつの惣じく句は入る八
句ごとの心は歴々しく一首の詞は解ねしてすこしも
かすがはよきにも上下のうけ合とゝとく含してその
西京は詩ねべしそじめよきもんはにも理はおもくさなは
合せんとするもの縦者の心京は眼あるのく

夕　花

夕暮のむもれ外の月ら鐘の聲も尓かはそで見すに春風ら吹

諺解云長樂ノ鐘ノ聲ハ花ノ外ニ盡キ龍池ノ柳ノ色ハ雨ノ中ニ深シ　李嶠詠雨

此聞ゆる聲もむかしのあはれに、ものゝ音はさまねゆへ夕暮の
それの外ごとくはかの計え梅也むの外をうる夕暮れ鐘の
音も句よ揃ふ春風の吹くむの香ながるき之詩のん
花の光よ音ね也へ外とゝかは句と同しんなかもの
外よちかねくもふき鐘あれども其の香ろ風よつれて
きこく鐘の聲も句ふと外の字よん縦付るをこそ多くは
字もおもしろかるよ鐘の音こよ心ざろしれともよもべ
しらこ
愚案は句のん全体を樂ノ鐘ノ聲む外盡とゝふ句に
てよある詩の心にも樂宮の鐘とむの中にあれども
その聲の聞きこえもおもくるれともむの外をも是
ふるこのんえ仕術よゆるぞ春風ろむの香ことゝもよ鐘の
聲もさそふ也へ鐘の音その句ふこゝとふ笑よくるかゝ

諺解にむかしの外にハえふかくまきさき鐘あれども此の
香が風につれてきこえ誰の声も向ふの外の字を
かけ付たるといへるハ花のかくれがくの任なれバ
此のあたりにて誰のあたりに谷にてありにあたらく
られしハ風がさそふぬとよむ第之詩意をも叶ふやうにて
字の義をもかくへり注者のかくに鐘も寺にあるのを
あるおとなりてよめるしく詩の心ハ此永の字の義
此独りに注しつらゆへハあるがひあるの宮中に鐘此
あるなり　南史張永暁音律大極殿前鐘聲嘶云々
詩經白華鼓鐘于宮聲聞于外云々　漢書東方
朔傳陛下宮人簪瑇瑁垂珠璣撞万石鐘とあり
又宮中にハ花あるの事文類聚引朱子語録云
唐殿庭間種花枝故杜詩云花覆千官淑景
移又云退朝花底散云々又王維が詩月暮帰

何處花間長樂宮　こゝ花の外の鐘の声といふにて
鐘が花の外にあるといふにて此ぞ声が花の外にあるを
注者もまた外にある事なく鐘ある事とも心得たるゆへ世間にも
暮されども花のある事にて花のさきてあるなど解をもし
あやまり説ぬるの人々も有る之

夜ル思ヒ花ヲ

しらぬ身のつれ秋月まつにて畑暮るゝまゝ遠くあるまゝ入行く花の面影
諺解云燈をもちて秋来まちうるむかしのあるまでも暮て今宵
にてたび面影の木がたりまるを月にそへ入るはすこしの見えぬ
ゆへ我がいま面影の月よりあゆむも此ぞハ従しいそぐとしかしちまた
人のゆくさき珍ながり
愚案此の句も一日花によびひく暮るまゝ遠く草しく花
此ぞうゆへおもかげの月よりぬとしたがへて消え給へバ
ゆへうるまゝ遠ぐえてむかしの面影の月にうつるはいふなく花が中ち

大思(オモフ)ことは我身にかへて思ふと云ことを思ふにこそあるべき
諺解いとよりの深き心はさらにしれとあるべし

社卯花
卯の花の咲(サキ)散(チル)袖しや垂神垣(カミガキ)にさもこそ人の袖かはかる(カツ)らぬ
諺解云　拾遺神楽　榊葉の香をかくはしみとめくれば八十氏人(ヤツウヂビト)ぞまとゐせりける
此哥もと何とは人まねて白妙(シロタヘ)の袖もとめくるが
なやまれるか　玄刻古今　此歌の上(カミ)の菊(キク)は神さびて(上)にしも卯花
はや白妙の神よみて氏人の神の袖のかつ(カツ)らぬことなる八十氏数を
まはさなることこ
愚案　此うたも白がきねとよし作り出し八十氏人の神が
かつらぬこ卯花は白がきねにしくよあるゆ人もなまで
白妙の神は出しさふみて班守(サキ)咲(ツ)ひしもつることふり
卯のもの咲ひさしれ(し)とも夜(ち)このみちゆ人白がきねの
神ともかうぬこの人はこああ咲ひしの詞も紙よく

つくべし諺解卯花は白妙の袖とみえくとえ垂語しくえ
此者の風骨(コツ)はむしざりかに似ゆり
後撰集関白家にて　郭公未遍(カフ)
なほなりもすまでむかし作のきは月も里わく村雨(ムラサメ)のうち
諺解云　未摘(タツネ)　里わかぬ影(カゲ)をしてれもゆく月の入さの山ははれける
花(カネ)ありまかせ里わかぬと云詞は里わくと云村雨八
亦わすけくあるかたちぬ亦のあれでうえ富士もさく解の
光も照(テ)るれ亦でしと夜ぬ亦有く里はりくるさをれでうの月の
てらし亦うと咲(キ)て夜ぬ亦うと咲(カ)ぬさも世今もいかふふ咲が
我方にしきれどもすんあり咲(カ)亦あぬ亦のありつく未遍
まはれり　例　かえむ里わく月の光りは村雨(ヨシ)遍るよその
村さ　古今　寂蓮哥
愚案諺解大やうしらぬもれもさらかにの月のてられ亦くえ
咲(キ)てしきぬ亦しあらぬ人とは家ものりくひがこもらわ

めぐりにしものつゆのかかりて村雨などのあやしくてしさぬ
うらふるくものせ 〽やふせんこぬ秋なきゆめのゆるかゆしさ
おもひぐ村雨のうへ 新古今 家隆 ひとりねしものかなしきのつれなくく
今はやゆめとおもひてやすく村雨のあかきぬれだにもしやと
まめうくことよあり 〽今ぐふもなくはからしいとまれ村雨
まぐうつ夕暮のさ 玉葉集 後京極摂政 しんて村雨の雲や夕暮ぬれで
ならぐくハえならじこよあり 〽めしまれ今やとおもふ夕ぬれば
おもめくうりの村雨のうへ 新千 為相 〽あまきぬべきもの宿まれ
よわなしく今やとおもひめしぎれぬ 続後拾 為氏 いかれも村雨
式くうりの袖のかかしもとあり

淳正弄親王家三首に 郭公

里ごとに小声をしれけねでゆるなけどつれなきぬゆやまん

読解云 〽あふぐも声をしわすれでめふんてぬこう此君にたく
へくぞやら いさこのあつ ゆき古別 声はしらここの如くされすんぐ人かなずで里

とが君より入うちよし たうげのゆき 後別 〽声はなくゆきかしくなりやかゆり
人をうらしこひかりのあは 後撰 後人不知 等恩両人恋 〽なくをもよりが
うこそものこりなき小声の村よこころ我身ともかな 古今大臣 同恋下 下略
声のかく附るの里ごとに声は幸く徒方一同しちくなごきぬ
里の順こもおもはじとされども声はしなくとるぬゆえ人も一方は
鳴くも一声とするねならぬ里そつれなきをもひくなは立る
小く有べきなきこれも初附るの名之

愚案声はふぬもきく人の耳はふなるし外の里まさ
めくうとぎれのふきなぬべくれど我声は里ごとに小つけずれは
きこえぬゆへ附るのつれなきこいなか小人に附小くある
べしこせ声はくしこいよ古郭公く我声はかくらす
とよあり附るの声はなりけぬこきていまさかんとおさく
うらの人排体に体作りきびさん大切之よくく心に付べし
又古郭よ附るを里わかぬことあるあかりしも名別合来の

ちりひまこそなく

民部卿家歌合に　夕郭公

村雨の空(ソラ)よりすぐる夕(ユウ)べやしのびきぬらん

講解云　初声なれどもしのびやかに鳴(ナ)く声(スゴ)しく夕は物(モノ)あはれ

ハきゝつれどもなほあかぬ思ひの中にかへりてあ

らんとく

愚案此の歌のすがた村雲(ムラクモ)の空(ソラ)よりすぐる夕べハ時節

からのゆふべにて一声二声なくしのびきゝたる心

しのびきゝたる八時ごとにあまてなほしも物(カンニン)感(ヂ)しける

哀(イタ)ましのこゝろもしのびのあはれなるゆへにまことにいひ(コン)かゝる

まく聞ゆる初音の時なる夕(ジヤウ)通の声なれどもせんかう(セン)

とやこれは詞も此歌かうなるめでたき入れ(ゴ)ける講解

なほしものゝ思ひ入れ(ユ)の中にたれもなくいひ(ヘ)さるら

りし西行(ヨキ)法師の歌にも続集郭公　さよふけてしのひかね

ゆきまよふ月もみえ間(クモ)の村雨の空(ソラ)月も村雨の空に間あり

こなひなれども感(カンニ)思してハなほそれにしるべきことなり

浦の月の

まれびとハ中やまぬめのうらにかもえましより月の光

講解云　此すれぎぬめの浦にて石(モ)舟(フネ)のかよひ(スキ)くるべき浦なり

なにかにしの三(ミ)大女(スメノ)浦摂津(セツツ)列(シウ)せもあるかならぬめと有歌など有る

にほのうりかゞりして鏡もうつりかやうにまいひかけてからか

まれども今しも鏡(カガ)ゆゑぬるとくも有べきことゝえぬめのそしれいひ

かけらること

愚案まれびとハぬめのまつ詞とも人の心といへん

料(リョウ)せよ歌のかくれた月あかりの入れ(?)なれども山いづことも更にく

浦のみしれともえぬしてやあらんことあかうきやとも学(ガク)氏

さうのまいきとくえてあかず月のよの露(ツユ)も久しく

くりしぬれども今とうハまことなるえぬめのうしなかめゆゑ

首之諺解ニ今も残りぬ心くはれんとしてかゝる月白の
ひかり何のゆゑたゆまてか残りおぼえてかりなましかし

為後夜月

夕立のはれまの月のかげとしもしら雲かゝる空ぞすゞしき

諺解云夕立のはれて月の出るに猶ほく秋の時なる体也
村雲あれども月の光はもれてくるよし残れどもすゞしき夜の中ニ
有るべし月の光のゆゑたへなく明らかなる也ととぞ

愚案諺解のおもむきいかにも左候へども夕立ニ題する
五文字の趣なり注のごとく時ならバ村雲と書くも同じ
事にて夕立のことをきかずして夕立をまて月ニ入る雲も
かの夕立晴れし夕立の村雲もかきつくしぬ体ならんや
秋の所ならずともまさせよ諺解の説に而あらへべし

二条入道大納言家三首

吹ばかくやむ夕立も山がせにわかるゝ雲の夕立の空

諺解云夕立モ一方ヶあれバ一方ハはや晴て山がぜたなびくさそはれて
雲の行来するとのさまのとびかふ往還 往復 交加之云々

愚案古今 夏と秋と行かふ空のかよひ路はかたへすゞしき風や
吹らん是は天地の夏秋を行かふにたとへてあらはしたれども
きすゝれば是のつゞきにて出入候り

民部卿家百首よ

みそぎしてかへりぬさ振よ立田川夕つけ鳥の声ぞ聞ゆく

諺解云夏の秋みそぎかく明やらぬき有様也よくよく夏越むすぶ
かみ御祓がもとにゆふづけ鳥がなく立田の山をながめて行
古今人不知 古雅下 神中お巻出云夕づけ鳥とは鶏を云也世の中さはがし
き時四境のまつりとてあはやけのせさせ給ふ時に鶏を木綿
付て四方の関にてまつりける也云々 顕昭云四境ハ
東ハ逢坂関西ハ山崎関南ハ木幡関北ハ松が崎とぞ明
けれバみそぎして帰りぬる内に鶏の声くかげかく秋も明けり

みかの原の御幸(ミユキ)ひろく夜のをそろふ所なれはむかしはなくゐわたく

愚案諺解のおもむきはかくいはゞ立田川をよめる詠(セイ)なるき
に似たり 備案(ヘキアン)抄(セウ)の四境ハ今の事あの四境也 古今集此説(セツ)よ
りむじ立田川とも云は山への四境(シキヤウ)之説云の字に所への四境の
人が述もの今の事(ヘイアン)あれ四境の説 諺解にて作べき也今
飛鳥井(アスカイ)家の説に云に家の事(ゲ)境(サカイ)は此よく四方
の国(クニ)へつかはしけるは東に逢坂(アフサカ)北に鈴鹿(スヾカ)南ハ立田西ハ須磨(スマ)
之事に云々も此云の事ヶ所への四境へ此所ぜられしより今の
平安の四境の説なるべしこのことべし 備案(ヘキアン)抄にも考(カンガ)へたる也四境
の所説(サタ)もしられの備案ニや是(コレ)又見(オホツカ)なし

聖護院五首に　七夕

何ありて天の川瀬(セ)をへだてけん年に一夜(ヨ)の契(チギリ)ハし

諺解云 是の浮橋とは水上(スイシヤウ)にしくして人のわたる物(モノ)と是事ハ
其(エン)境(キヤウ)へりよひの物(ユクモノ)ならで橋とよ事よりて此ヶ所されども此所に

て八一夜のかよひをもてあそこもとと是の字(ヌ)にれもゝらん此字に
乗てあらんと有べしかならハ此の世(ヨ)おもて一夜と
定(サダ)めく淀まるるのうちにうなめともへてとふしくれよめる
哉べし 是ノ浮橋有口授一云々

愚案諺解は一夜りはかくもしそとも是のかうに思ふて
こひのかむむねりしく次あるし一夜(ヨ)の契(ヌ)とに直(ス)しに
あひすまゐうる之 希会恋(マレニアフ) 此あひしかも見えさせぬ是をかへ
うけしこえく又はしくん 新古 先後 逢不遇恋(アフテアハサル) おもひなるんの
やうのうつくしき夜の是(ヌ)のうちさめん 新古 不絶 逢不遇恋
見てのちかるうへの恋のこれりしも後(ナラ)よの是(ワス)忘れぬ
新千 お親 初逢恋 恋のよ紀後(ネン)年月の契(ワレ)にて
月お好むりん 珍玉 初遇恋 とのづへむすび初くもま
よふかやこの上つの是の契(チギ)に 夫木 新六百首 逢不遇恋 やりて
ちぎりしかるらめん云しえおむりき是なれば 新拾 実継

いづれも手をとりて逢ふよしなきを歎く

七夕を

たなばたもおもひやりけん天の関戸ひらけはあふよしもがし

藤解云「あまきいもとまれやすくぬめらわ秋ハ庭鳥あへずなきけ

てすくこも 赤人集 七夕歌 関あくは夜あけるまでなるあかし天の関戸こ

云よ天も何よくかしの橋よ逢秋ならぬでゆんその杯き

またこもんしてならくうけりしまとなしらん八下知のえんく

なけおくそのん文何をなんもなしきくこと

愚案此ハ函掌君函谷関の故事をふくみてかくあれくも

まかり給ふまれども此も筆のつかひくて書作り

秋くし家句十首よ

今さらうしまいとし世中にまへてすむ身乃秋の夕ぐれ

藤解云今さらん今さあるふと云詞之あはれまくと云詞く

今なく経首ともくもさかりしせられぬと云んと抵四時都

意若就中腸断是秋天とかりなるは秋の夕暮やん

まもまもおやまく此しくらゆうせされども今さらにはタ

ぞ見らきこもいそれおじ子細ハ毎日よ毎月毎年の世間

善悪の淑よ付而純て雨しはるるハ又枕のぎ事をあく命

を絶へきに許せられぬ人をへ志のびく住すむ身なれぞ今れ

秋の夕ぞ見らきとこいそれおきさこと見てハ堪忍するまく

うしともいそうしとうろくえりし平生の身の老花今をそ

云詞之「今さらん住うしとくもいうせん身この場宜の秋れ

夕暮 旁統和 旧合 吟ずべしあおうしは非 云く

愚案まりふく古より更字の字は去来れり更ハ字書よ再せ

復也と注せり今さうなると云詞今とさく今ふて ひとい

教まそくづうそてもよく通ぜらせおのんてむすしようり

之世の中にへくまくしきの秋今よくと秋の夕暮は

うしともいそうとい再せ今再びの暮そても きこ

ゆゑに諺解にさきのからの字をあらそふは非（ヒガ）ことなるべしわかりがたし
いろと照日の秋（アキ）の詞（ヒツ）によりてよみなしたるなるべき也

長秀家にて萩露

草も木も人（ノ）のけしきも又萩（ハギ）が本の露は今はさらに
諺解云 狩衣（カリコロモ）紀（キ）まで人（ノ）の絵（ヱ）にゆるされし萩の花の露の神へうつる
色（イロ）ハ紅く我袖の露（ツユ）にぬれたる心へ萩の花の上にもうつり
これぞ萩がうつれる事の兆（アラハ）れて今萩の花を露にまさりぬ
色にぬれたる心の雨にうつりたる衣（コロモ）にぬれたるところなり
白露の上に袖の縁（エン）によりて言ひかくる事
愚案 上にて文字まごふべしとかく見くらべ紋（ワケ）ゆゑに
衣にぬれしが我ところもまへりぬれたるとして その
色（イロ）のうつれどは衣（コロモ）も萩（ハギ）をむすびてぬれし心 諺解に
露のことぬれたる事なれば こそもにぬれたる事（ナリ）ぬ
さることハ萩（クハ）をもって（エ）みればこそ今も紋にもかはりてそこよ

白露なれてこそよくしめて堀（ケンサイ）左よ色のうつろふが直（ジキ）にある
色てうつろふ正なにもうつろひゆくにやされど紋の色のあかき也
従ひよくもてなして意味（イミ）ちがひなくきこえたるなるべし

里ノ擣衣

秋の夜もさればかりて里人もやまきぬたの音（ヲト）ならぬなん
諺解云 里人（リト）が秋の夜（ヨ）すがらの砧（キヌタ）に夢（ユメ）は驚（ヲドロ）かされて秋もさき
砧はもちろん夜の砧（キヌタ）を音（ヲト）かくつく打つんどと云こと
愚案 歌の心ハ里人の砧（キヌタ）打をきくにつけて小夜の砧（キヌタ）の
音（ヲト）は人おどろかされし此里人も又砧（キヌタ）の音ともゆるて寝（ネ）ざ（アル）べし
ことあり 諺解に夢（ユメ）ハあらそはれて この歌一首（シユ）の中に
夢（ユメ）のことはなし 夢に見る人のひとかとなく聞にぬる

夜擣衣

なくむしハよりも秋さむの露（ツユ）紐（ヒモ）に袖（ヲト）をまくらにうちもなし
諺解云 秋さむの露紐に形（ナレ）ある虫（ムシ）たるも鳴よりもなく声（コヘ）も

うすくあらはるゝ旅人のかへりうきあはさむともいとゞなほあはれなる
なれば行すゑを感慨の情をよせ侍るを高くいふて出たる
のよりかゝりに羇旅の事ハ土かも旅もさね姑ゆふくとるかうこと
愚案此のうたも出て旅にまよりあしまがひくまむ
まるらかゞみいよく高くなれば行きてるゝ読解り
にひてるごとく旅の事まし猶もみえ姑ゆうくさうかこゝに
昔むつくし旅のさゆるしまざひくなれ行きてる旅ゆく
を高くさよみかは次の所に言やまりてわすれなさむら
あきしのやふのにをぬきさぬ旅もなしてあかしの
さむきさゆへふきわにおぬるいさよあか

茶園白家まて　菊紙

うけくこくうけのふきくゆきむきさみこれも千種のむこんるまて
読解云　惣じて惜哉の惣花千種西东さらぬを賛する對
て菊なり紅紫黄白あるをまたうすきも有淡も有く

多くある中にも殊に菊の一名をも千種のむこえるまでいわく
のむもの見ゆかさのみか名ありきけのきく姑で一年に二度咲ふ
むさうりえれ　後人不知古本下　此姑くまく時うつ有されぬ菊のむ
うけるふかゝる名のあされど日これらのかにして見るべしこと
愚案うつろふえし名の哀ずるとこえおもふ今うつろふ時
に名のまされどさいふ紅黄べし此のかくて菊の名く
みせおしくハわかねど或ハ或ハくうつろふにゆへくう
千種のむさ花はかおゝく中くかるをこれかと心膠の
句に野辺や庭の千種などに對して此菊をとふるを
読解　薄きも有こきも有かくちらうかうきそへくとい
かくのごとくらわでも上おかてきさうにきさがみなくとふ絶え
さやりまてハうつろふとい所詮申しこの一首うつろふを
いふ詞眼なりまとその花の趣ゆきずとむ所あるべし

清子左大納言家にて　野径寒草

霜がれのいまや草葉のをそからん限りハ見えぬむさしの原

読解云上句倒句となる也今や草葉の霜枯の果ならんと云ハ以上下へさかさまよりとかくる也 下略 又曰 武蔵野ハ遠く広きゆへ果のなきやうにあるを むさしのハ何ぞも枯の果なる ゆきいる月も風のすゑに明らん 古今上 通具卿 なども草の原の紀内にまつ色なる野の末まで目路に見えしが草の枯てハ色なきゆへ末までよくハ見えぬなるを今や草ハ霜枯てし時分なるらん是限りも見ゆむさしの遠き果然といふこと

愚案 此歌のこゝろむさし野ハ限りも見えざれども草葉限りもかく今や霜がれの果ならん也是ハむさしのゝかぎりなきといふよされども草むらのかげに果しなるを見えかくれするよめり 読解ハ草のかれてく色なきゆへ末まで見えぬなるを今や草ハ霜枯てし時分ならん也草の枯果なとく末のたまぞ見ゆれ又末がたえぬほく枯そてし時分ならんと推察せんも近き所ある料簡なるべし古今 我恋ハ行方もしらず果もなしあふをかぎりとおもふばかりぞこれも果なきといふ事をかきとせうけたる歌也

滝氷

おとハせく滝つしたるま江さへむすぼこかたく波の音も時雨

読解云田村の清げなる女房のさしむかひよく清房風に絵語らんじりゝて滝おちるゝ音おもしられぬ滝つて歌よあるさまつ田人ておかせされ名れど也あり三条所 おとハせて滝の うちの滝おれやおいもハ見えれど音のきこえぬ 古雑上 此歌く んのつられ滝をちゆへ落てもと音せぬこのなるに此歌ハんの内の滝てもなきて水のゆへ此滝も音のきえぬことなるなるくまにハたゝなくてなかねこなき 惣通之又小あハなこ

又くらゐの中の将にうつりなきて都にてもありけれと云て
月しろの雲の上のふたゝびかはれゆくまでそれを申したり
あり 伊勢物語に
百東説解にいはくさてあるとことはにてこそあらめと古賢の
説にもかくもありぬへしと古今集の心のまゝにうけ給はれり
説にもあるへし古今集の心のふかき雅のおこなひのまさに
ことにも申したりける栄雅抄にいはく心のふかきをうけ給はりての
ごとし誰ゆへにとこそおもへと君がためにこそとおもへり
きこえれと誰ゆへにかくこころにかなふ我身なれはこそ
まことに君ゆへにおもふ人のこころをこそしらせたまへと
申されしをたとへていはんに其心なかにてはこゝろえへし
等持院殿御家五首 野ノ宮
かくてもみのちとせも春のむめかゝのうら
諺解云かくてもなをなしの字也かのことくこの色の千種に
ふくの色傳へ奇と種たのむくさのおあつかひ下略 又云此歌此
いろのむさしのゝのちくさにいりていかなるかたちをもつ人の
明かなる祝世説の心なく移りかはるとも
愚案かくてもなをなしの心ことくむくもしの字此字あしく
名をとふれはしかと千種の色なとをかしくいかにもあらむ
ことにいろのあはれにもなく種の色は誰とつくなるとも
いふ事也諺解にいはくこのかたちのおもかけなく
述もなくともかくはいろの浅きたゆたふやうなる
ちくさもかくとよみしに中の五文字にて心のあはれにもいろの分る
とまことに歌にも心すくへからさる故に
なるへし
聖護院五十首 杉ノ堂
あさぼらけ杉の村立みえて朝くもりの尾上の雲にさかりなく
諺解云暁にいたりて峯にかゝりて明くは杉の堂の

うかくとえゆる也おほよめりうつりの字疑ひのうち捩れぬる
に注する雲ハ雲のかゝりとハ雲のうごく体也明かの横
雲の体也 まつの杉の尾ろの上をしるし夕へ峯に別るゝ
横雲の空 定家卿 古春上 云々
愚案前のうたよの明ぬる山や尾の光ゆへ明ぬれど
杉の木の間もいまだ細くのこるのゆふぐれの雲ハ峯に尾に
かゝりたる常にて雲がわかれ／＼棧杉の村立とみゆ
へだてれど尾の光の暁はまたくらく明ける時杉の村立か
まびれて細く雲もかゝりたるごとくして使也宮注のことく
杉の尾れうかゝりとみゆる也荒ぶ杉のむら立がよい
みゆるといふ縁のできぬ勘ならぬべし

勝 如本書く前よう作しり 関ノ尾
かる尾にかゝる絶えぬ夕々清見がた関もる波をひまもあらじな
読解云 関守 波清見よよ前のんく関守る 波てひまと

たくみにすく雪は浦にべきよしその前こやかん尾にゆるかなく
うつり来よるを清見の薩埵山の下は通ふよ浪のうち
たれにならむ波ならんとく通ふし也関のうち波こそいふしく
今は上の方にみちはめぐらる也俗にいふおや子しらず子しらずといふ
所也拍子なしく通れて波のうちきわて流るゝ也おやう
きになれて其子おもはしの附て波そひまもあらじなとえ
ひよもらくありつりたまくたの絶えることうて
愚案前のんは波を滞らく関はありて人かなしも遠ざかる
べきは又ひる尾にたゆたていふらんは通さぬがこゝろ無
あり読解のことくならば関守るこそ詞清見が尾の
縁のことて詮なし只波こそ見まうても同じうすて
見む滞るとはもしは少くいふよく見ゆる所なり
波の関守るそひまもあらぬは尾にはたゞまさく人を
通さぬがこゝろよく考へみるべし

草庵集難注下

桃井宮二品親王家三首懐旧

桜井元茂述

よりあひにつけて申しよせなき事とかねて
読解云懐旧なしと事世間なんやうく訓なり申し
今さらあはれなく懐旧のかなしみたえていかにしても人伝へて
もいれずす直てハなはんいかさきゆへみひとくかならず候ハて
申くる中にもえ又却くの方よそも此中旅の春の雨ま注す
訓なく達ぬさきみゑくとこ
愚案なのかくおり人まく来なかくもなくといふれし
それならまつてくもしてするいとそれやさんさ
却よ中へ却くたりふんいはもしてかぬる之は集なの方中に
おもひぬるてもく後て申くまよなるをかるまえそれなか
ぬのはなきかいかかきの注釈となしそ見ゆ乏しほ今
まくハよ来るしもえしげるてさまらゆへいとかく旅ま

ふえぬやうにおもひたえ家臣のうちへもやはらく制する
ゆへ今にいたりてハそれぬことに及びてハ兆民かしらをかたぶけ
みなくにおちいりぬべしかしなほ道かしこくれはにふかき
ことばなるべし

住吉社哥合に

しのびかねたるのかずよかゝる葉の霜まつくむすぼゝるらも

諺解云 恋の景物の信夫山因に忍ぶの哥の心を恋に寄せ哥は
これもしのぶにたへぬ恋の思ひの露はかりかくの景にしのびかねて
せまくおもへどもかなしさくもあらびぬ時ぞ却へうらみへ
きゆる一命に志のびあへずしてもぬべしてせねんりもして
ぬゆへしてこれしたとえられこそせこ横音通ひしてせぬこ同し
んくとこ

是東にしてこれしなば諺解にしこせこ 横音通ひして是
同しくこゝにあきもなしとそのまゝにしてもこゝにもこれ

してもかたこしきんする詮(セン)ずるきこえ右の記にしてかなこ
此詞に西言の我おゆふんかばへのしるまじきかとし
何ぞうしてせこ紀こりふんなかこのしてかしなごふんへ
恋の礼れにして第一(ミチ)人にもしてかへきかにしてかし
あこいましめる詞へ哥のんへ我恋ゆへんぶれてこひ
そむれかるこも世の人にしのびくしてれぬやうに
せんことへ 諺解していしなおふへにしてせぬこ尺ち
ゆへ義理いかがにて世へ小くきこえ

清子左大納言旬十首哥遊(ムシロ)恋

後どや玉にぬるましかやむしかをするまでこきしのひとも

諺解云 夜ゐをつらし来ても侘(ワビ)人の後の世のとうろかわぬる
忠岑 古今 猶ぬる床(トコ)にめやもおやむしかをおかまでに君ゆし
まとん 百十二 千恋二 久しくよいぬは恋ひしの年のくる年月ごひのや
すかこのてこゝもくよりにもらひんへむつらくてもいはずとも

おもし待ちぬはよりしずかにやむしかり殺(ナサ)かく縁(ヨ)でなくしなり
まくもまんこんづよくまわしに従(シタガ)ひもとハず今くとさんとの
ふられど道(ミチ)の縁(ヨ)たく渡(ナミダ)は玉さめくやくやあんそつれ
あきんなきさんきのあさにかくんはまふなくいふそれそ
まわしせんなく渡くゆく云付こえぐなの伏こここ
愚案等のかて我ひらすぬらあやむしかのよくぬかぞ
人は云士のひてし進(スス)むの殺(カタ)られど果(ハ)くいふげきうり
それし渡(ナミダ)の玉は、おやむしんの縁(ヨ)かくぬきうんとしあり
読解の通かたくして行云(イツ)し此等も不逢云(アハ)はあわせ前(セン)
後(ゴ)必れし不逢云のんはよあり待云しし行れど顕(フダテ)云の
あうひあり斜云の通(トヲ)りおは、まくるす列の一の並(ナラビ)
までんて行うで

祈(イノル)云

こたり常はうくある神まみうきしてら死なりふと行(ユキ)き何らん

読解云　思せしこえまし川よせしみうき神そうけまた
ありうち　伊物　此等まあまくあわ出よ常よ大人左躍(タワ)く
うくあらハ謙(ウン)うあらこ左理はいく之いの重で神し正直(シヤウヂキ)此
頭(カウベ)まやどるこくよくうくあわ下向え神そうけずもあわよ
かうかのかにかく神のうけぬからきとうのうけぬといよふそ
神はからる恨(ウラ)むらハ何のすぐ之此等の全体(センタイ)業平(ナリヒラ)の等は
評判(ヘウバン)してあわんと勉しく云つて逢すの論(セン)ふしく祈うが本意(ホンイ)
あうまる業平え思せしと祈(イノリ)て云の何理うあぐひあら此へ神と
うけまうれ此人よ祈(イノ)うまよいなく云しくぬさらがうきここそ
うれは迷惑(メイワク)しなもひいとひくうけずもあまうかうなこころ
そ行すぐ祈里やうかわしきこ我も逢(アフ)やうにと祈るへしこ
丹誠(タンセイ)はつして祈るこのふんば一首まこめくあるえんねうか
こまきおあこ工夫(クフウ)すべしここ

愚案等のかて左理あることはうくある神まよ、ぬうきるおは

いつしまへと祈ることもうきなりしいかのかすゝハなほ行く
ふきさるゝ神もうけずなりにし揺らるゝのつゆかくされハうき
なるいとひくりてし涙いぬと何ごとくそこら恨みなどこえ
何ごとりて神も祭りなかうけまへらさうなりしあやかに
ゆかんたのしいわうさゝる事なれともひゑりして何ごと叫ぶにふ
あかり藤解いつまゆ弟役はやあかしく注しれこ注の
うけさへきこえかし

寄枕恋

我のみのよくもこゝえてまくら侘しくひとをぬるよ夜の夢にゆるし

藤解云 枕かす又よらんともあきなる涙もきこの代わりし
つるうす 平貞文 古今三 とらこえて枕もまくねしわがちまる涙ぬる枕文
いせ物 まことくもひとまちかこえでもかくぬ枕
いせ物 古今三 あやまちの侘しく夢まよおもへりやと枕よりかれ
たゞ夢のまんかわ夢まえていひよく衝んのかくかくき
やく枕なにとてもよしおもひて夢らと見えて枕がつけくよてこら
ちいさう枕かつ衾まず枕も覚めくの夜のうちなうゆきてへき夢
独ねの夢の中の…まで也あれそつけもえんさまじをき
えそいりせんこえとそ 下略

愚案 我のんおもひを行きひとくひとをねならふ小まゝ
こく夢にはそんてられども我らくゆらこのふかきゆへ枕と
え己てかしこをとく思侍ふはよあるぞ枕のうちはうきるまた
ひびるしハせわれむ門前よく味やへしいかれも独りこる夜
やうにとおりかんなはあらさうわ藤解はかは枕がきこえく
へまつやうこうしもぞうかしるべきかとそのほのさらんなう
わしきさまにおもひ又枕かへまつぞんとやいうかいふ
ゆりあらんにけれは

前大納言家 寄衾恋

ことのつしかそのよるもなえてぬんのもとこえらえるらん

諺解云此哥はくだ〱し前に有一首のおもて歌の心を用し
やしなふ言葉のはしたなきやうに有しを後の人こゝろえ
えらぬ人のうたをとりかへりてかくなるべし
こと

愚案此の人のうたをみてぬおもひかけらんとて
おもしに今はいかにと思ふにまかせてかくいひしはいまだ
けふしんのおくもあらじとかぎりなきをゆめしつゝおもひ
諺解の説にはくはしめてぞ思ふのよしなくなげくなれ
かなしみをこゝに見てきはめてのいはんとすらん
詞のかはる心前後のむすび詞のつゞきかはりてこゝろえて
こと葉にかはりて見ゆくべき心のかはり前になるこゝろ
たゞえあはれのかはる今詞にも見ゆるにあらはれ
かはりゆくまへにもあらはしんのかはりゆくとぞ
前へし

前権大納言家月次三首　忍絶恋

なげくなよちぎりの後ぞうれしさのうらみし人の心のうちを
諺解云なげく人ぬこえ契のなからぬ絶ぬる今契の
絶ぬ後ぞなほもなくに人めがなにみえねばとのびくとかく
なども絶ぬべきやうゆへ何とかくたえぬるを思ふもかく
絶ぬべきとおもへば八首前の末の山の心にかはりて
なほ川合の人は人にもよらず人のゆくへもしらぬかなしきは
さやうにぞ思ふに心前へこと

愚案此の心は契をとはるゝにつけてやくらむもあるか
後にもなのはくなれどもむかしおもかげつもりてにあるべし
いとはなりがたきものにおもひしゆへなることのちにもある
てみしこともかくるは実にさきのかつむねもあるべし
後もいつしかにも絶ぬべくもなしといひて人の人は
はかなき人のつれなきひとのしるべなく我身の身をこのめと

よめり諺解よつてみれば秋らつまえのさやうなくえ
てみし人の詞できをかえぬくは奇絶の絶ゑ今らだ
ものかなは似たる者か人今見えし
右集作　和義秘下　家中く　愚絶恋
うきはれさのみ志のぶれしねよわやまはりて事と京で和らん
諺解云とされずしてうき中ゆもおとろゝさじともしくさひをし
まへきかはろのまうにしくらく人恩ひとくてなき有しおつかま
人ら忘らしせ志らねども我が思ひしがむかのわぬねよ欲く人の
秋を忘草もなく神らくつめしみらく志がなくらく忘れそうておと
あわあわくにさのら恩ぶまずりね物とを後悔すらんあわ
恩草ら種とぬく忘草と成るるとけ今をくまある事の
さのらハさやしにぞ事也とやしに志のびくて存居るゆえ
あわらく
愚案思ふ草り種とぬく忘草と成るるとけ今てよめる

とりふけ今もくとりはは沢秋ありしぬくえ具愚草忘
草し一草二名く外沢の説として八草の名二種
とすゆらく伊物闕疑おなぞ愚草の兼蔵聞ある
あすしろくむうしかの恩草忘草同着なかの指の木也
栖にに似たる歟恩草とのひ一つ掛るに似たる歟忘草
と常にはなくされともさのし草の形おさは形ねとく
とんふし只一草二名くは不疑しくとくべきことのぶ民
字とも志のむのとおなじ故郷の軒端也事のあるらう
ゑれはさ一草二名とゆるへき

独吟百首

おもひつゝさめくもわる葉とや志るくる身のまたのくさかん

諺解云五文字ハ絶ゆくつしくれもひしきえ今あらぐ絶ゆるを
つくれりひしよ又ぬみくとひやまりなき人のかんくるやか
やはきぬるふれぞ絶りしも又何とぞうしくそらかりなく

よゝゐるのあやゝすまらされのよゆへといはれても死もせだ
して松の葉居らも也夢ともえ夢をとそやのそうまたく
はてるまえ前に出るこ

愚案云ひしまよ人ゑねくふるひしまこゝは羽之留の
なえといはれなじなびしへまじきさゝねくれもひしく
うのんゝまうやくく今出我身はよふあらゝあるをと
あめ読解らんもひしまと以羽紙絶えくつくさひ
しくこ秋をめ羽のつゐへおもく義理明らかなしだ
志まこゝは羽くさ云のそまえあるゆへねくのんぬ
こむる也よく味へあるべし

等持院贈左大臣家の哥　暁

志げゝある枝見ゆずきく星よ迷きゝる初音さすまゝあるねざ

読解云　鶏の初音え寄うしだ殊さ星と鳴く明らかなれ
だまさゞらふそあれとも枝見のんえ都なるゆへきこゆる也

孟子浩然の気をおもふべしとぞ

愚案諺解に孟子浩然の気をおもふべしとは朱子注云
浩然之気盛大流行の貌盖善養之以復其初也
此の暁に浩然の気をおもふ何のゆへかなれとも
孟子平旦之気といふこともあるべし朱子注平旦之気
謂未与物接之時清明之気也といふ平旦とは此時之
云居家必用にてさえむかく考へ見るべし

海辺夕

浪のとの入りまちかく見しまゝゆくかたに海士のつり舟

諺解云　浪のよる岸の里まち入口のあたりちかく釣舟のかへゆく
ふ京へゆかやうある仙之たゆるまえ見ゆるよふ縁之へ添て其まに
川よえらるゝ縄を縄るゆゑふんえまるゝめや　次ノ海上月
に見しまく

愚案此哥ねまゝ見の羽紙よく味ふべしおのれく

あまの釣舟と同じ事なるゆゑひ居るる夕まなよく
此舟に比の海に入ゆく也つり舟ゝ入りまちらく成りるを
諺解に入日のあまのちるゝつり舟の事まふさぬる後を
て心ましかりの詞絵事し

薄暮松風

悦色しい河をもわかぬ松の風しきは夕日の色ぞすご淋しき

諺解云也 夕日残されや黒人の松の風のいろもわかぬ
意もするなり 後人不知古意一 いろをもわかぬとハ松の風のに川そ吹
也も吹ぬことふるのなく常住吹きて風の吹くて淋しきよ
又松の風よ夕日のまず八一入さびしき也此やの字疑のや
に非ん云きこゑる也のぐしるすとくや甚長類也べしるこ
愚案云のんて風の私よふてりのこも夕しふてもの
ことを時はいろをもわかれふてとのゆへこも見えてねご松
風の吹く夕日のがりまへ一入さびしく見ゆるとの儀なり
いろをもわかぬは諺解常住の事といへり五日一風十日一雨
事どころ也風は常住吹ものならば注者松の風の不
変なるよしをも見侍るゆへはなやかなる又云風の吹て
さびしきよりも松の風しき夕日のまず八一入さびしきとの
儀も意味てきや分し所風を私有故なぎしかるべうしも
おぼしねど夕日の影のことにさびしきよし也上五文字も
の字下七文字ぞの字はあぢなく見侍るべしとし注者の
んれこゝくおもしく新古ともしべし新ぶとハまじへらず老子
上士聞道章口義曰天地之間音之大者莫大於風霆豈
常有哉

山家路

我ぞかるらぬみぢかくしるしもて山のつまぎの道こそかなし
諺解云しめて外にはつまぎは山人もみなくなりけひぐも
在しが言人しらきこ世にも出しやせん今ハ文外にすむ人を

なく鳴ぞきこゆるなくへくつよきかたらゆ人をも撥(ハ)くなる
ぬとなるともなきこゝろのつよきかたしくなるべしとく
愚東諺解にもしめし外よりつよきかたら人も有(アリ)くらひら
も年しげきも人ゝくらき世(ヨ)しなしやんなどいつらりておもふし
歌のん五文字の我ぞかゝ人山家(サンカ)のすむ人我独(ヒト)りて歌か
独(ヒト)りて立(タチ)居(イテ)くつまきころあく山の名あらそ名の後(アト)んか
るまじ独(イタリ)く山家(サンカ)の淋(サビ)しき住(ヲモム)き無(ナル)べしとこうえりかなしめ
りの人くらき世(ヨ)よりせしやんなど外(ホカ)人(ヒト)にかなしく入(イテ)ながめ
なる注(チウ)釈(シヤク)無(ナ)べし

述懐

かゝるに老くせきよく根ありつれぬ名をかちもしぬき
諺解云 和歌の浦ハ紀州(キシウ)の名所なれども歌のうへにてく
いふ事ハねざ根(子)の老(オヒ)くせきもかけどもまぎらつれぬやうし
吾(ワレ)も老年(ラウネン)よりくこのむ歌の名も埋(ウヅ)もれぬやうにこそおもふ

あきらむうつれぬ名
諺ともに苔(コケ)の下に朽(クチ)はてゝ埋(ウヅ)もれぬ
名は人のうちにのこりき 泉式ア 金雅下 遺(イ)文(ブン)三十軸(ヂク)軸々金(キン)玉(ギヨク)声(コヘ)龍(アリ)
門(モン)原(ケン)上(シヤウ)土(ツチ)埋(ウヅマレ)骨(ホネヲ)不埋(ウヅマ)名(ナヲ) 白氏朗詠 文詞
愚東歌の心もよりひとも今くらきぬれど後(ノチ)の世(ヨ)の
つゝめなこうなべき名あるふ男の挑(チ)みも和歌の名を名(ナ)
なうづまぬやうにとおもひて心ふきをすふれこの歌を名なし
埋(ウヅ)むとも知れぬとゝもし死後(シゴ)のすてゝ本(ホン)意(イ)なうしがふ悲(ヒキ)し
より詩歌(シイカ)少くも老へらるべし老年まく名(ナ)を埋(ウヅ)まぬと
よろこぶべしとこそ

述懐

おもひこし身のなよしのやまともかなしよけゆく衣は子(ネ)見(ミ)にけるちゝ
諺解云 我よかけゆくこそ我よりひのるかけるるのかきく夜(ヨ)の字
ように未もくさちとなる子(ネ)もかのなきくふ夜(ヨ)のなれあるるあがよ
かなしゆく山かくきに 身(サメ)えてくるとやて(ツラ)くるとなげむしぞ

吾世をふけぬ月とまりて　於玉　前年に身の力のまゝのあら
ましますとせしがうらかなしひけると初冬にかなしむゝおくそふなき
事ぬれかひしこと後悔してなしまえること
愚案諺解大意とむねすべき物ならずやかれども正意に
うつしおのそえわりきがしとやせよしかくやあらむ
なども身のよれすぬ程とあるまじごとにおもへども老く
後れる老いもしまずあのあるゆへわがよのふけゆくに
去さがひくハね覚ぬるどもたかひまするなるまじこえわが
世のふけゆくよべ老後のうらみいたる諺解初冬におもひける
こゝろなくハ意味なし

泊舟と

難波ぞよ川かどのうきねして芦間の浪のをとをぞきけぬる
諺解云　遠よの風ハ中川とてさびしの間の浪のうきね
かしかましかるものの外風あらきゆへ日数ば経てあれたるの
波のたゝきを舟かくはまるやうにきこへぬるこれもやとて風の
遠まさまれさしといふうちこすかりこと
愚案諺解にたかひの外風荒き夢へ日数ば経てくこ
いはんかたくだ風よ川かどのさいまで風のあまり心に廻
捨てあるくも風あるまじ風も川よはふべきすべて遠く
よ川かどあるかさもいざし出のくて舟はおたべきうらどの
遠風もあれたるればそうきまねらしれ日数ば経
て浪の音はまつあれたるこゝろえ候

梅

続集　基任　許かく三首あるよし候しま
春の内よ咲袖よお春そふさぐさあらう梅のさるをぬるを
諺解云　梅もとそ春をぬく咲袖くさそ心有くて盛てぬ梅
あるよ冬の春の内を咲袖されても春もあそくよ盛りし
あかく咲袖もこゝ尓間のあまさぬさるがう梅のさるをこゝろわ
ひるぞそ咲袖もこゝろ春もちよくいふらう盛ぞわるこゝろえ候

遠東方のかしこをおもひやりてはるきたりてとゞくべく殘（ホド）へく
咲（サキ）ぬれども梅もはる（ハル）の雪（ユキ）の内にも咲（サキ）初（ソメ）つれてはるはなるまで
一句（カウ）に梅のむかしの盛（サカリ）をこゝろにおもひはかりて詞にあらはすと
りてこそおこめくみるも讀解に梅のむかしはる（ハル）になり
て咲（サキ）初（ソメ）しこゝろ又冬（フユ）の雪の内に咲（サキ）初たれどといふなり
さるハ冬の雪の内より咲（サキ）初（ソメ）てはるへきしてはるハなるべし梅の
こゝろがよりまへさはまだはるハならずさえかへりてとぞいふべし春を
一句（カウ）にて梅のむかしのかゞさらずこゝろなりまだはるの雪（ユキ）の内
より咲（サキ）たる梅（ムメ）なれど冬よりさへこゝろに若葉代かにより雨
なく作かはり冬の雪の内より咲（サキ）たる梅なれど早梅（ソウバイ）の
句にはむかしなりやまれり
聖護（シヤウゴ）院（イン）宮（ミヤ）木幡（コワタ）にうつらせ給ひし時二条武朝臣も参りて
京都讀侍しに　為後
雪こなたそらにてはる日のてらしそれども山はまだなく

讀解云雪のある上へいかにも白の出でて雪（ユキ）はかはりて
たれども今春日の晴（ハル）る時風の吹（フキ）くもの白ちるハ白雨（ウゴ）
雪のかゝるやうにもみゆるにて
遠東方のかしこはる（ハル）の雪（サキ）のあるかなしへゆかはくものみえん
されども梅（ソウ）のさくてよくいへく白の雪（ユキ）に似（ナル）こゝく
みるてまくのもとは風の吹（フキ）あはむ枝積（ツモ）
ることのみにさくる句色（ソウ）こ盛（サキ）るてはる白ことを
なるかへはいへり讀解のごとくものちることいつて霧（ラン）を
のおよぶまじ

将軍家にて
初（ハツ）瀬（セ）山さくらにきてもおもへばとなくかねの音（カネ）の都（ミヤコ）から　木下藤
讀解云初瀬山の鐘（カネ）をきくも桜の盛（ヨ）りはなるにも鐘（カネ）
桜の色（イロ）に盛（ヒロ）き心にあはれやく桜の盛（ヨ）りをひとへ鐘（カネ）ハ
いかなるやうなりはなとなく聞ることいへり例かなく

こゝもの横雲(ヨコクモ)の峰(ミネ)わかれて桜にかゝるしら雲の山　西園寺太政大臣　玉春下

愚案此歌の心は初瀬(ハツセ)山の花(カネ)をつゝみて松の雲と見なして峰(ミネ)わかれてもいとゞ花をこえてはいつまでも有けるをかくまでさそはざりけるに
まかの人もこゝそ待(チ)わかれ杉(スギ)もかくれ花(カネ)のかたちになる
諺解の心は初瀬山の花を松(ヨ)の雲と見なせるさまなるさ
以てれどもとゝてこと意をいれ一首の意味(イミ)を說(セツ)得たるもの
をしこの外(ホカ)義(ギ)のあるべきにあらず無(ナ)きもの也此峰(ミネ)
まじき松(ヨ)の峰(ミネ)の中へ常(ツネ)に峰わかれて今(コロ)も(ヨト)花(カネ)かたにすれ
おもかげにおもひなしたりとも此ころにも詞つゞきおかしう
べし常にあまりかゝるるさいはひ哉

中関入道太政大臣あつそ月前諸作して
風吹(フケ)ば雲(クモ)も跡(アト)なくなる松のそら(ツラ)にすみわたる月ののどけさ
諺解云雲の晴(ハレ)たる(クモ)跡(ホト)えも月の光(ヒカリ)さやけきと見ゆるなり
雲(クモ)の跡(アト)もなく晴(ハレ)つくしたる時はあきらかにしれば明(メイ)白(ハク)になく

天なくかはらく中(チウ)にもさやかにみゆる也
それかは松の月このあたりを見れどもちらぬ　後京極摂政家月五十首　高懸(カカッテ)列(レツ)宿(シウ)
稀(マレナリ)　月圓(エン)　杜律
愚案雲(クモ)ハさかに空(ソラ)にあらはれしてて月の空(ソラ)にかゝるも
あかり諺解にかしこの月のさやかにみえるとつきて表(ヲモテ)一面(トウ)
きこえてあはれになく作者(サクシヤ)の粉(フン)骨(コツ)の意味(イミ)ありてさし
似たり

入道二品親王家五十首哥に　月前虫
虫(ムシ)のなく草(クサ)むらを埋(ウヅ)みぬれば虫の音(ネ)もかれがれに聞(キ)ゆる月影(カゲ)
諺解云新撰(シヨク)古今(コキン)にも入て草むらは埋(ウヅモ)れて深(フカ)くふりて
やがてされども月にあひてなく虫の声を(ミ)ふたゝび聞(キ)ゆるといへり
愚案草むらに月にあらはれたる夜(タカ)もなく木(キヨ)のあひだ
埋(ウヅモ)れねども草の陰(カゲ)にかくるゝ虫の音(ネ)は
埋(ウヅ)もれてはおほくいかにもはかなげなる花(カヤウ)のありし風
情(セイ)されども此の精(セイ)神(シン)ならん也

擣衣

よる人のもとにおくらんためにうつなりともしかりとてもみなかやと
譜解云 蓬のしくあれし宿おもひしも人はとはぬにおもひそれ
ごろも有しもとこひしやなきたりて秋もなにくれと待らん
とはれもなきぬいまのかたにうつ衣ぬれてもおもひいくとせ
よもぎふにあれしまでもかれのみにかなしきかれのなかにはしらぬてれ
蓬生 柾の荷ひのにもかきあれにけるあはれならぬ所の哀は
それもとりいまのかりにきなりとものうち心なしとおもへぬ
あるいはそれ上にて思はるゝこともあらなむいに世のみや

愚案擣衣の説多く徒人（ツヒト）にあるとてもかれも他国（タコク）にある
夫（ヲット）のもとへおくらんためにうつなり人はいふまでもなし詩にも
とうきを成のもとにおくる化（ツクル）まつ杜（ト）詩（シ）寧（ムシロ）辞（ジセンヤ）擣（ウツ）衣（ヲ）倦（ウムコトヲ）一（ヒトヘニ）寄（ヨス）
寒（カン）垣（エン）深（フカキニ）用（イ）尽（ツクス）閨（ケイ）中（ノ）力（ヲ）君（キミ）聴（キケ）空（クウ）外（グワイノ）音（インヲ）李（リ）詩（シ）長（チヤウ）安（アン）
一（ヘン）片（ノ）月（ゲツ）萬（バン）戸（コ）擣（タウ）衣（イノ）声（コヱ）秋（シウ）風（フウ）吹（フキ）不（ズ）尽（ツクサ）總（スベテ）是（コレ）玉（ギヨク）関（クワンノ）情（ジヤウ）
何（イヅレノ）日（ヒカ）平（タイラゲン）胡（コ）虜（リヨヲ）良（リヤウ）人（ジン）罷（ヤメン）遠（エン）征（セイヲ）とよめるもおなじことなり

暮秋月

あはれしてはかや暮ぬる秋のなごりをしみや山のはの月のかくれぬるを
続解云 むかしおもはぬ月のなれや山のはにかゝる月のあはれなる秋かや
おもふらん方丗ならぬ秋のなごりをしく秋はてぬ映（エイ）ずる月の
ゆきかへりこのおもはすみきてかくはしてやなからぬとは
ぬしらぬなどもなかれみえやうもなんとなく同じかな
ひかんやはりのかなきなんとこゝ

愚案あはれしてはふるきをもて源氏物語にあはれなる詞
にさこふ此ふ足なるを注せりしかるにものにまかれたれども
山のなのみのかぞへもしくまはるきぬらかに宗祇おほせ
あきをあはれと文むすびてかなしく満足せぬまゝ
あはくもいとへいひなしさ注をかきのせて
秋の暮ゆくは不足してや日のかゝるまゝに月がなれ
おもしとおもはぬこゝろなく秋のなれゆくは満足せ

すゞしく月の影もあはれなりといへり 頌解のさしく月に
こずゑもあらはにして暮ることはやき心なるべし

冬月

嵐の吹には落葉吹まく風さえて寒きよの空に月の更ゆき
頌解云嵐の吹に杜の木の葉は風に吹ちりてさえわたり
更ゆく影の猶寒月の体なりさやけく風の吹は
さらなる杜の木の葉もみなちりて月のかけもくまなく見え
更行くさむさなり 又句吹まく八木の葉は散ゆくに月のかげさやけきを佳とす
愚案まくも挑の字也 吹まく八まきちらすのたくひ
またひとつのくさの葉のさむさの木の葉吹まく谷の下風 頌
解のごとく樹の字ハくまれたるよりちりくるさむさなく
我古今谷より風の吹上る庭のこの葉ハ吹はらふ
よめりとまへるさまなり 後集 河辺の霜よかのかは
よまれていて吹まく風にさえて山かつ

色もかはらで松吹ならし風にさむき夜の霜 霜ハ樹とさく
さもありしと松樹とりかは霜ハ山おろしに松
吹まくに風もさえて霜も吹ならしさうなりけり
和歌には實白夜入せ給ひし時 下毛君
せめくまづ月の人のとゞまりにけるでもさらにさもあらん
頌解云人のつらく恨みぬくるとすぐまで遠く思ひもかけず
ても逢ことかなはぬ人のつきぬハむかしの名残ハ
あさくてもよしをあはれにてさまにあはれさぞ侍るべし
うかまよろこびてかならず人もつらさ見ん
恋をなしぬるハ得心しく人のやすくも思ふ
りや有べきさり人のあはれさもさりながら
川ハ根ごとしといふは逢事をしるといへり
原のさとのさ我世の中にあらんとはいはで
下に恋しく思ふこと

教 歌古 蒙之助

愚案おもふにつらき人の我がいふことを我がよりくして人を怨
うらむるより今は逢ふ事もなくしてのみあふ人のつらさ
きはまりて身を忘れてはなさけもなくてつらくとも
我がうきをしらせんと思ひて　つらき人の上ばかりをおもふは
これらはみな我が身の上をよくよく思ふべし　といへば
うらむるも諺解といへるは人の心のかはる事を
まして八雲御抄のおもむきにまかせて　かはらぬ人の心を
しるべきも人の上をうらむる中のあさましさはいはでもしるべし
我とわが心のつくし顔にて人の心をつくしてこころ
はかなき我が身にしられぬ人の心のかはる事をなげき
かなしくおもひいでてつくしてきゆべし

短歌
うつりゆく人の心はさだめなし　身の程をしりて人の心を
あらぬよそのこころ　うらみてもかひなし

諺解云　あらぬ世は今日ゆく末むかしの世と見ゆる也といふ
愚案　むかしの世にあらまし世といへるもあらぬ世むかしの事
ごとくもあらぬ世の心をうつすの姿をしるしむかし
がらくはあらぬ世を思ふ前の身にもろの世は人も今はや
あるくまくなく思ふもかはるもむかしのごとく
はしぬるかな

誹諧
みじかき夜の寝覚めがちなるよりみても思ひかくれなき
愚案　おどろく寝耳に水といふ俗説なり
をもひらく

連歌
うつろはぬ世のかはりゆくを見る
かはらぬものはまたつづくさため

諺解云　つとめける時にあはぬさ仮名(カリナ)文は口おもひて

ゑぐれあく 家持 百十九 禮記月令曰仲秋月鴻雁來玄

鳥歸一雁も来り燕ハ帰るゆへくらべんこと

愚案淮南子地形篇土龍致雨燕雁代飛とあり

くりきかへ倍ゆしうた

ゆるき筆をきこくすゝやかぬらん

世のうちのあふぎなくしくおさめし

諺解云 魯恭王好治宮室壊孔子舊宅以廣其居於

壁中得先人所藏古文虞夏商周之書及傳論語孝經

科斗文字 書經序 此のなかに蛬のかろゆへ之代付筆し

文は付きを代筆まゝ文字付るのあしきかへくれ

之ぐまかるゝ吹出れ出する遶壁暗蛬無限思 白氏むりの

落ぐくみかうしく世のゝなりれきかぐくすゞれまゆり

きらうひ残つゝゆみれさしゆくるやうれゆるぞろ 夕顔 堂

古筆為蛬の古句也如赤蛉 ことこ

愚案晉干寶搜神記曰春分之日鷹變為鳩秋分之

日鳩變為鷹時之化也故腐草之為螢也朽葦之

為蛬也稻之為䖵也麥之為蝴蝶也羽翼生焉眼

目成焉心智在焉此自無智化為有智而氣易也

雀之為蜃也蛬之為蝦也不失其氣血而形性變

也とぞ又毛詩陸璣疏廣要に引搜神記曰朽葦為蛬

世ここかくのごとくなるうへに干寶搜神記朽葦為蛬さ

なるに萬葉の化者葦の字筆の字をかへたるはあやまり

ならむとおもふに本のまゝにしるしおくなりひとえの

れゆるとて侍り

うちなびきこまもさえてやゆきふりて

ゆふべの谷風ぞ

諺解云 谷の南北也 とこ

愚案後漢書鄭弘傳云白鶴山ノ鶴常為仙人取箭弘採薪

得一遺箭頃有人覓還之問何所欲弘知其神人也乃曰常患若耶溪載薪為難願旦南風暮北風後果然
諺解
中まみをあしさ夕の谷風を待てんし山をおりて
谷の南北とうわさやしれ其てんは小児の連歌
えらの作し山吹れさな
おしめどもとゞまらぬ春のちりしきてふき
続解云此句落葉部集誹諧部に入春の帰るとよめるを
こゝろえ
愚案催馬楽に無力蝦　ちからなきかへるかへるかひなきかへるかひなき
かへるかへるかひなきかへるかへるかひなき
続解は春の帰るとよめるをこそ注しけれ
然るのおもひよりて読めるならんかし
おもふに続解に引る其外誹諧集の名も然るべく
詞やもちろん文字をちがへの事もまた
りぞおもし只眼の人ハ志るべけれど初心の輩はまちがへん
すれハとくとしらぬ事と思ひしれどあまねく学の
法はえんなれど志るしくはしきを得たまふむ人もありぬべく
とめられまほし

享保十五庚戌孟冬穀旦

京師　野田弥兵衛
江府　同　太兵衛　壽梓

櫻生曰余因参季吟先生
私淑焉于正法眼蔵写瞽者
有眼之形而暗其用解書者
有手之翰而暗于倪則将奈
書何叔世以翰書瞽人者多
矣櫻生手操金箆豁開天下

之眼蔡華辞意朗乎灼然復炳于世如黼黻五章也君子曰危而不持顛而不扶則將焉用彼相矣櫻井相矣哉

谷元淳書

宜春堂女子阿[illegible]庫書